

各関係機関・団体長 様

愛媛県病害虫防除所長

病害虫発生予察情報について（送付）

このことについて、5月の予察情報を送付します。

病害虫発生予報（5月）

平成 31 年 4 月 26 日
愛 媛 県

1 気象予報（高松地方气象台）

1 か月予報 4 月 18 日発表（4 月 20 日～5 月 19 日）

〈 1 か月の平均気温・降水量・日照時間 〉

	平均気温（1 か月）	降水量（1 か月）	日照時間（1 か月）
四国地方	低 10 並 40 高 50 高い見込み	少 30 並 30 多 40 ほぼ平年並の見込み	少 40 並 30 多 30 ほぼ平年並の見込み

〈 予報のポイント 〉

暖かい空気に覆われやすいため、向こう 1 か月の気温は高く、期間の前半は、気温がかなり高くなる見込みです。

2 病害虫の発生予想

水 稲

(1) いもち病（育苗～本田初期）

ア 予報の内容 発生時期：並、発生量：やや少～少

イ 予報の根拠

(ア) 去年のいもち病は葉いもち、穂いもちともに少発生であったため、種子、わら、籾がらでの保菌率はやや低いと推察される。

(イ) 現在、育苗中や本田での発病は確認していない。

(ウ) 気象予報では、気温は高い、降水量はほぼ平年並とされていることから、発病を助長する要因は少ない。

ウ 防除上の注意

(ア) 健全種子を確保するため塩水選と種子消毒を必ず行う。

(イ) 種子消毒にあたっては、薬剤の効果を発揮させるため、①乳剤以外の長時間浸漬では処理中に薬液を攪拌すること、②処理後は風乾し薬剤を十分付着させること、③浸種後 2～3 日間は水換えしないなど基本事項を遵守する。

(ウ) 苗いもち対策は、①有効薬剤の播種時処理、②覆土を十分行い播種した籾を露出させない、

③育苗中の高温多湿を避ける、④発病の早期発見と薬剤処理による応急防除を実施する。

(エ) 本田では窒素質肥料の過用は避ける。

(オ) 育苗場所付近に雨ざらしの稲わらや籾殻を放置しない。

(カ) 置き苗は、移植後本田での葉いもちの伝染源になるので圃場内外に放置しない。

(キ) 常発地や罹病性品種を植え付ける場合には、地域の防除暦に従い、本病に登録のある育苗箱施用剤を必ず処理する。

(2) イネミズゾウムシ

ア 予報の内容 発生時期：やや早い

イ 予報の根拠

(ア) 4 月の定点調査において発生・被害は確認されていない。

(イ) 気象予報では、気温は高いとされていることから発生時期はやや早いと予想される。

ウ 防除上の注意

(ア) 常発地では、本虫に登録のある育苗箱施用剤を処理する。

(イ) 成虫の水田への侵入を防止するため、水田の畦畔際に障壁（あぜなみシート等）を設置する。

(ウ) 本虫に有効な育苗箱施用剤を処理していない圃場で発生量が多い場合には本田防除を行う。

防除の目安は収量に影響を生じる 0.25 頭/株の寄生密度である。

麦 類

(1) 赤かび病

ア 予報の内容 発生量：少

イ 予報の根拠

(ア) 子のう胞子の飛散量は少で推移している。

(イ) 出穂期以降、天候に恵まれ開花期も含め降雨量のやや少ない状況である。

(ウ) 気象予報では、気温は高い、降水量はほぼ平年並とされていることから発病にはやや抑制的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 出穂 25 日後頃までが二次感染防止に有効な防除時期である。

(イ) 乳熟期に温暖（平均気温 17℃以上）で連続降雨が続くと発病が増加するので追加防除を行う。

(ウ) 赤かび病による、カビ毒汚染を防止するため、乳熟期の防除、収穫後の速やかな乾燥調製、倒伏麦は収穫・調整を分別し被害麦の混入を避ける。

かんきつ

(1) かいよう病

(平成 31 年 2 月 28 日付け 病害虫発生予察注意報第 5 号参照)

ア 予報の内容 発生量：やや多～多

イ 予報の根拠

(ア) 2 月に行った伊予柑での越冬病斑調査では、発生園地率は平年よりやや高く、発病度は平年並からやや高くなっている。特に、東・中予地域では発生園地率が高く、南予地域では発生程度が高い傾向となっている。

(イ) 気象予報では、気温は高く、降水量はほぼ平年並とされていることから、発病にやや助長的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 夏秋梢などの罹病枝葉を除去し病原菌密度を下げる。

(イ) 強風による付傷は発病を助長するので防風垣や防風ネットなどを整備する。

(ウ) 昨年度の多発園地や発芽前防除の未実施園地では開花前及び落弁期の薬剤防除を徹底する。

(エ) ‘甘平’、‘愛媛果試第 28 号’、‘はれひめ’等は本病に対して罹病性が高いので防除を徹底する。

(2) そうか病

ア 予報の内容 発生量：並～やや少

イ 予報の根拠

(ア) 定点調査（3 月）における常発園地の越冬病斑量は、発病葉率、発病度とも平年並の発生である。

(イ) 気象予報では、気温は高い、降水量はほぼ平年並とされていることから発病に助長的ではない。

ウ 防除上の注意

(ア) 発病葉及び枝を除去する。

(イ) 多発園地では落弁期の防除を実施し、その後も天候不順が続く場合には 6 月中下旬に追加防除を行う。

(ウ) フロンサイド剤の使用に当たっては皮膚かぶれに注意する。

(3) ミカンハダニ

ア 予報の内容 発生量：やや多～多

イ 予報の根拠

(ア) 定点調査（4 月）における雌成虫の寄生葉率並びに 1 葉あたりの雌成虫数はやや多である。

(イ) 気象予報では、気温は高い、降水量はほぼ平年並とされていることから発生にはやや助長的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 園地内の早期発生樹で 1 葉当たりの雌成虫数が平均 2～3 頭に達した場合には防除する。

(イ) 冬期の機械油乳剤を散布していない園地では、発生が早まるので注意する。

(ウ) 薬剤は掛けむらのないように丁寧に散布する。

か き

(1) 炭疽病

ア 予報の内容 発生量：やや少

イ 予報の根拠

(ア) 広域調査（3 月）による越冬病斑量はやや少であった。

(イ) 気象予報では、気温は高い、降水量はほぼ平年並とされていることから発病に助長的ではない。

ウ 防除上の注意

(ア) 園地内をこまめに観察し、越冬病斑がみられる結果母枝や 5 月下旬頃からみられる新梢の発病

- 枝を早期に除去する。
(イ) 昨年、発生の多かった園地では新梢発育期から1～2回防除する。

キウイフルーツ

(1) かいよう病

ア 予報の内容 発生拡大注意

イ 予報の根拠

- (ア) 関係機関による4月16日時点の集計では、キウイフルーツかいよう病の発生面積は2.4haとなっている(県内キウイフルーツ栽培面積:379.6ha,平成29年産果樹統計資料及び果樹栽培状況等表式調査,県農産園芸課)。
(イ) 4月の定点調査(品種:ヘイワード)における枝幹部調査(3園地・各5樹の全枝)では、3園地で樹液の漏出を確認した(樹液漏出数/樹:0.93か所)。
(ウ) 気象予報では、気温は高く、降水量はほぼ平年並とされていることから、現在の発病状況が続くものとみられる。

ウ 防除上の注意

- (ア) 5月も新梢及び花蕾への重要な感染時期であり、特に強風雨により発病は著しく助長されるため、薬剤防除や防風対策を徹底する。
(イ) 園地見廻りによって、葉での斑点の発生、花蕾の腐敗及び枝幹部からの樹液漏出痕や枝枯れ等の症状が確認された場合、周辺への拡散防止のため、発病部の早期除去を行う。
(ウ) 伐採は、平成31年3月改訂の「キウイフルーツかいよう病Psa3型の防除方針」に基づき発病程度に応じて適切に対応する。
(エ) 開花前の薬剤防除は、コサイド3000の2,000倍(薬害軽減のため、炭酸カルシウム剤200倍を加用)を使用する。なお、コサイド3000は受粉への影響の恐れがあるため開花期間中の使用を避ける。
(オ) 強風雨後、既発生園や発病園地の近くでは、樹体損傷による感染防止のため、抗生物質剤のアグリマイシン-100 1,000倍、カスミン液剤400倍、アグレプト水和剤1,000倍、マイシン20水和剤1,000倍を応急散布する。

果樹共通

(1) カメムシ類(うめ、もも、キウイフルーツ、なし、すもも、かき、かんきつ等)

ア 予報の内容 発生量: 並~やや少

イ 予報の根拠

- (ア) 県下40か所で行った広葉樹落葉中のチャバネアオカメムシの越冬密度調査では、全県での越冬量は平年並であり、越冬確認地点率も平年並であった。
(イ) 県下5か所の集合フェロモントラップ調査では、第3半旬まで少~やや少の誘殺数となっている。また、県下9か所の予察灯調査でも誘殺数は少ない。
(ウ) 気象予報では、気温は高いとされていることから、飛来時期が早まると予想される。

ウ 防除上の注意

- (ア) 今後の発生は、気温の上昇により(平均気温20℃以上)、越冬成虫(7月頃まで生存)は、ヒノキ球果が成熟するまで、サクラ・キリなど餌植物を移動しながら果樹園へ飛来する。
(イ) もも、なしでは早めに袋掛けを終える。
(ウ) 果樹園への飛来は、曇天で夜温が高い日に多くなるため飛来に注意を払い、飛来が確認されたら防除を行う。
(エ) 被害が集中する山林に近い園地での被害が多い傾向にある。越冬密度は低い場合でも局所的に果樹園への飛来が増加する場合があるので成虫飛来には注意する。
(オ) カメムシ類の防除薬剤の多くは、カイガラムシ類やハダニ類に対してリサージェンス(農薬散布による増殖)が起こりやすいので散布後のカイガラムシ類やハダニ類の発生に注意する。

野菜

(1) べと病(冬春きゅうり)

ア 予報の内容 発生量: やや少

イ 予報の根拠

- (ア) 4月中旬の調査では、平年並の発生である。
(イ) 気象予報では、気温は高い、降水量はほぼ平年並とされていることから、現在の発生にやや抑制的であると考えられる。

ウ 防除上の注意

- (ア) ハウス内の換気に努め、多湿を防ぐ。
(イ) 草勢の低下は発病を助長するので、適正な肥培管理に努める。

- (ウ) 老化葉はできるだけ除去し、圃場内の通風を図る。伝染源を減少させるため多発葉を除去する。
- (エ) 発病の初期防除に重点を置き、薬剤が葉裏の菌叢までかかるよう丁寧に散布する。また、病勢が進展している場合は、治療効果の高い薬剤を散布する。

(2) 褐斑病 (冬春きゅうり)

ア 予報の内容 発生量：やや少～少

イ 予報の根拠

(ア) 4月中旬の調査では、発生は認められていない。

(イ) 気象予報では、気温は高い、降水量はほぼ平年並とされていることから、現在の発生にやや抑制的であると考えられる。

ウ 防除上の注意

(ア) ハウス内の換気に努め、多湿を防ぐ。

(イ) 草勢の低下、窒素質肥料の過用は発病を助長するので適正な肥培管理に努める。

(ウ) 老化葉はできるだけ除去し圃場内の通風を図る。伝染源を減少させるため多発葉を除去する。

(エ) 栽培終了時期を勘案しながら定期防除に努め、薬液が葉裏までかかるよう丁寧に散布する。

(3) 黄化葉巻病 (冬春トマト、夏秋トマト)

ア 予報の内容 発生量：並～やや多

イ 予報の根拠

(ア) 4月中旬の調査では、発病株率は平年に比べやや高いが、6圃場調査し発病は1圃場のみで圃場間差がある。

(イ) 4月中旬の調査では、媒介虫のタバココナジラミの発生は並である。

(ウ) 気象予報では、気温は高いことから媒介虫の発生にはやや助長的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 発病株は発見次第速やかに抜き取り、袋に密封したり、土中に埋没するなど適正に処理する。

(イ) 今後、定植する圃場では、媒介虫に対し、育苗時～定植時のネオニコチノイド系粒剤を施用し定期的な薬剤防除を行う。薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤の連用は避け、ローテーション使用を心掛ける。

(ウ) 媒介虫のハウス内侵入を防ぐため、ハウス開口部に防虫ネット(0.4mm目合以下)を被覆する。また、紫外線除去フィルムを組み合わせると効果的である。

(エ) 媒介虫は多くの植物に寄生するため、圃場内外の除草を徹底する。

(4) うどんこ病 (冬春いちご)

ア 予報の内容 発生量：やや少～少

イ 予報の根拠

(ア) 4月中旬の調査では、やや少の発生である。

(イ) 気象予報では、気温は高い、降水量はほぼ平年並とされていることから発生にはやや抑制的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 発病葉や発病果は速やかに除去する。

(イ) 薬剤散布に当たっては展着剤を必ず加用し、葉裏や芽の間隙部に薬液が付着するよう丁寧に散布する。

(ウ) 同一系統の薬剤の連用を避け、ローテーション使用を心掛ける。

(エ) 栽培終了時には、いちごの株元を切断しハウスを閉め切るなどしてハウス外への孢子飛散を防止する。特に、育苗床に近接するハウスでは注意する。

(5) 灰色かび病 (冬春トマト、冬春なす、冬春いちご)

ア 予報の内容 発生量：やや少～少

イ 予報の根拠

(ア) 4月中旬の調査では、冬春トマト及び冬春いちごで少、冬春なす及び冬春きゅうりで並の発生である。

(イ) 気象予報では、気温は高い、降水量はほぼ平年並とされていることから発生にはやや抑制的である。

ウ 防除上の注意

(ア) ハウス内の換気に努め、多湿を防ぐ。

(イ) 過繁茂や軟弱な成育は発病を助長するので、適正な灌水や肥培管理に努める。

発病果や枯死茎葉は早めに除去する。

(ウ) 発病初期の防除に努める。また、耐性菌の発生を防ぐため、同一系統の薬剤の連用は避け、ローテーション使用を心掛ける。

(6) ハダニ類 (冬春いちご)

ア 予報の内容 発生量：やや多～多

イ 予報の根拠

(ア) 4月中旬の調査では、多の発生である。

(イ) 気象予報では、気温は高いことから発生には助長的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 葉裏を中心に観察し、発生がみられたら早めに防除する。また、同一系統の薬剤の連用を避け、ローテーション使用を心掛ける。

(イ) 葉液が葉裏にかかるよう丁寧に散布する。

(ウ) 薬剤散布に当たっては、ミツバチや天敵への影響を考慮して薬剤を選択する。

(7) アザミウマ類 (冬春いちご)

ア 予報の内容 発生量：やや少～並

イ 予報の根拠

(ア) 4月中旬の調査では、やや少の発生である。

(イ) 気象予報では、気温は高いことから発生には助長的である。

ウ 防除上の注意

(ア) いちごの花や幼果の寄生状況を観察し、早期発見による早めの防除が効果的である。

(イ) ハウス外部からの成虫の侵入を抑制するため、ハウス開口部へ1mm以下の防虫ネット(0.6mm以下が望ましい)を展張する。

(ウ) ヒラズハナアザミウマは、多くの植物(主に花)に寄生するため、圃場内外の除草を徹底する。

(エ) 薬剤散布に当たっては、ミツバチや天敵への影響を考慮して薬剤を選択する。

(8) ベと病 (たまねぎ)

ア 予報の内容 発生量：並～やや少

イ 予報の根拠

(ア) 越年罹病株の発生は早かったが、その後の発生は降水量も少なく緩慢であった。

(イ) 気象予報では、気温は高い、降水量はほぼ平年並とされていることから、現在の発生傾向が続くものと考えられる。

ウ 防除上の注意

(ア) 越年罹病株や二次感染株は見つけ次第早期に抜き取り処分する。

(イ) 早生種では、球の肥大期になると葉身に淡黄緑色の楕円形の病斑が出始めるため、圃場観察をして発病初期からの防除を行う。

(ウ) 気温が15℃以上で曇雨天が続くと多発しやすいので防除が手遅れにならないよう注意する。

(9) コナガ (春キャベツ)

ア 予報の内容 やや多～多

イ 予報の根拠

(ア) 4月中旬の調査では、4圃場中1圃場において多の発生であり圃場間差が認められる。

(イ) 気象予報では、気温は高い、降水量はほぼ平年並とされていることから発生に助長的である。

ウ 防除上の注意

(ア) 薬剤抵抗性の発達を回避するため、同一系統剤の連用を避けローテーション散布を心掛ける。

(イ) 老齢幼虫や蛹には薬剤の効果が不十分なため、早期発見・早期防除に努める。

(ウ) 薬剤の効果の低下が疑われる場合には、別系統の剤を選択する。なお、フェニックス顆粒水和剤及びプレバソンフロアブル5は、県下全域で感受性の低下が認められており使用を控える。

(エ) 幼虫は主に葉裏に生息しているため、葉裏まで葉液が掛かるよう丁寧に散布する。

(オ) 発生源となるアブラナ科野菜の収穫残渣は速やかにすき込み処分を行い、圃場周辺のアブラナ科雑草の除草に努める。

【病害虫発生予察情報】

愛媛県病害虫防除所ホームページでご覧になれます。

ホーム > 仕事・産業・観光 > 農業 > 鳥獣害・病害虫対策 > 愛媛県病害虫防除所

ホームページアドレスは <http://www.pref.ehime.jp/h35118/2406/byocyubojo/index.html>

【農薬使用時の注意】

- ◎農薬の選定にあたっては、農薬取締法に基づき登録された農薬から選定しましょう。
- ◎農作物の安全性を確保するため、農薬の使用にあたっては、適用作物、使用回数、使用時期、使用濃度、使用量、使用方法等の使用基準を遵守しましょう。
- ◎病害虫等の発生を的確に把握し、適時適切な経済防除に努め、農薬や労力等の低投入を図るとともに、低毒性農薬を使用しましょう。
- ◎農薬による防除のみに頼らず、耕種的防除法、物理的防除法及び天敵導入等を積極的に取り入れた総合防除を推進しましょう。
- ◎同一薬剤の連用は耐性菌、抵抗性害虫の出現や助長をまねくので、農薬のローテーション使用を心掛けましょう。
- ◎農薬の使用にあたっては、当該散布場所の地形、当日の気象、養蚕、養蜂、その他の環境条件を考慮し、周辺環境に影響の少ない薬剤を選定するとともに、危害の未然防止や環境の保全に努め、農薬事故防止対策を徹底しましょう。
- ◎農薬を使用する際、農薬のラベルに記載された登録内容、使用上の注意事項等を遵守し、農薬の散布にあたっては、農薬の種類に応じた保護具を必ず装着しましょう。
- ◎農薬の保管管理や取り扱いに注意し、紛失、盗難等の未然防止を図りましょう。